

オリエンテーション・ 導入：近代キリスト教と政治思想

1. 無教会キリスト教の諸問題

2. 波多野宗教哲学の射程

2-1：弁証神学から宗教学・宗教哲学へ	
2-2：波多野宗教哲学の挑戦	6/16
2-3：波多野宗教哲学の射程	6/30
2-4：他者論——波多野とレヴィナス	7/7
2-5：象徴論——波多野とティリッヒ	7/14
2-6：日本キリスト教思想研究の課題と可能性	7/21
Exkurs 1：戦後70年の教会と神学——組織神学の場合	6/23
Exkurs 2：ハイデッガーとキリスト教	7/28
フィードバック	

<前回> 1—6：矢内原忠雄の科学技術論

(0) 近代という時代

・いつの時代にも、しかし近代特有の。

・無教会の近代論：矢内原忠雄『無教会主義キリスト教論』岩波書店、1982年。

・「信仰と理性」(1947)

「信仰は理性を否定しないが、理性を超えた領域をもつて居る。理性は信仰を否定しないが、信仰以外の領域をもつて居る。両者は二つの環のやうに連つて居る。」(15)

楢田のイメージ：内村鑑三「楢田形の話」(1929、全集32)

・「復活論」(1947)

「死んだ肉体を再び起すのでなく、新しき霊の体を賜ることが復活であるとすれば、之らの子供らしき愚問は一掃せられる。「甦る」ものは人間であつて、肉体ではない。肉体は朽ちてしまふのである。」(33)

「復活の希望があればこそ、我らは此世の苦勞を怖れず、誤解を気かけず、確かな心を以て信仰生活を歩んで往くことが出来る。而してこの日常生活に堅実な歩みを与へることこそ、復活の信仰を迷信と区別する實際的標準なのである。」(37)

・「宗教と政治」(1947)

「人は正しき宗教と、迷信的宗教との見わけをしなければなりません。その見分けの標準の一つとして、正しき宗教は政治を清め、国を興す力あるものたることを必要とするのであります。」(48)

・「神癒論」(1951)

「まことに科学の進歩とそれに伴ふ合理的精神の普及とは、近代の特色であり、それによつて宗教から多くの粗野な迷信が除かれた。近代合理主義の発達は、基督教の歴史にとりて決して損失ではなく、かへつて信仰の純化に寄与したものと私は信じてゐる。」(89)

「靈的と理性的と、両方の神の能力のバランスの取れた把握」「我らは聖霊による直接的神癒があり得ないと主張する者ではない。しかしそのやうな神癒が聖霊の能力を示す唯一の方法でもなく、最大の方法でもないことを主張する。」(89)

(1) 矢内原の現代とわたしたちの現代

1. 近代／現代に対して。あれかこれかでも、妥協・埋没でもなく。それは何か？

・「現代の危機とキリスト教」(1954)、類似性：憲法、軍備、教育、そして原子力。

2. 原子力政策の原点(あるいは攻防)としての1950年代

4. 政治経済の論理による原子力政策(平和利用)の推進

- ・危機を歴史の深層において捉えること（批判的学としての人文学）
- ・矢内原とティリッヒの世代に戻って問題を論じてみる。

（2）危機の時代とキリスト教——矢内原忠雄とティリッヒ

5. 現代は核の時代、そして宇宙時代（近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的变化）：「自然」の徹底的な改変（外なる自然も内なる自然も）

- ・ハンナ・アーレント『人間の条件』（ちくま学芸文庫、1958）

20世紀の科学技術は「人間の条件」を変容させる可能性をもっている。

20世紀の科学技術の意味と両義性、欲望：充足と暴走

6. 原子力の両義性 → 原発と原爆

7. 矢内原忠雄

1) 「原子力時代の平和」(1956)

「真の問題はそのような止むを得なかったか否かという点にあるのではなくて、原爆という破壊力の大きい兵器を使用することの罪悪性にあるのです。原子力時代の平和は、破壊力の絶大な兵器の出現によっておびやかされている」

「トインビー教授の講演」「原子力という巨大な動力は、平和的な目的に用いられる時には機械的生産方法と結びつき、破壊的な用途のために用いられる時は戦争と結びついていく。このように現代は戦争の時代であり、機械化の時代であり、そして原子力の時代であるが、かかる時代において人に自由を与えるものは宗教だろう」(163)

「科学が進歩すれば、それによって無条件に人が幸福になると考えることは全くの迷信であります。幸福になる面もあるけれども、不幸になる面もあって、原子力時代になっても人は本質的に少しも幸福にならない。不安と不自由とが重くのしかかっている」「皆おびえている状態です」(165)

「原子力時代にあって、動かない心の平和と自由を人に与えるものは、まことの宗教だけあります」(171)

2) 「原子力時代の宗教——科学技術は無条件の幸福を約束しない」(1957)

「原子力の研究は時代の寵児の観を呈し、原子力という前代未聞の強力な動力源の発明により人類の幸福と繁栄にすばらしい前途が開かれるという予想」「原子力神社でも建りそうな勢い」、「原子力神社はまだ末社の方で、その背後には科学技術神社という総本社がある」(173)

「原子力時代の一つの特色は、国家権力の増大である。原子力の研究と応用は巨大な費用を要することと、その大部分が国防上の必要という名の下に行われるということは、この研究並びに応用に対する国家の管理統制を強化する。原子力の秘密を国防上の理由から国家が保持することは、学問研究の自由の要求と衝突する」(175)

3) 「原子力時代の宗教」(1957)

「原子力時代に住んでいる人間は、ますます人間らしさを失って、人間味が乏しくなってくる」「寿命も長くなってきましたけれども、それで果して人生が楽しくなるかという、必ずしもそうではないらしい」(179)

「学生諸君も簡単に自殺します。これも一種のノイローゼ症状でありましょう」、「それからもっと大きな問題として、戦争と原水爆で非常な不安と恐怖を人類が抱いている」(180)

「宗教は知識を排除するものであってはいけない」「今日は科学も真の宗教を尊重するし、宗教も科学を尊重するようになってきています」「信仰は知識を刺戟した」(185)

「他の宗教もしくは思想に対して寛容であるか否かということ」(186)

4) 「原子力時代の教育」(1957) 5) 「原子力時代の思想」(1957)

6) 「科学と道徳」(1959)

S. Ashina

「自然科学の研究には巨額の金を出す国も、社会科学や人文科学については、なかなか大きい研究費を出しません」(291)

8. ティリッヒ『宗教の未来』

1) 「宇宙への飛び立ち、そして地球を眼下に見下ろす力を得たことの結果の一つは、一種の人間と地球との間の疎外、人間が地球を対象化(objectification)したことであった。・・母なる地球は、完全に計量可能なものとして、観察の対象である大きな物質の塊と化した。」(50)

2) 地球脱出の欲望の前面化が現代の文明内部に大きな不安を生み出した。近代以降の科学技術の進展による不安の増幅。

9. 科学技術の両義性の影の面を認識するとき、キリスト教思想が科学技術に対してもつべき関わり方として、科学技術の批判的監視者としての役割を挙げることが可能になる。人間存在の有限性と罪責性とに規定された科学技術の両義性は、科学技術の力が増大するに比例して、その潜在的な危険性をも増大させることになったからである。しかしこの危険性は人間にとって偶然的な事柄でなく、むしろ科学技術をその本質に組み込んだ文明の運命と言うべきものであった。したがって、科学技術、特に近代以降現代の科学技術に対して向けられるべき批判的な監視の目は、科学技術に根本的に規定された文明全体を視野に入れることが必要になる。

(3) キリスト教における科学技術論

(4) 課題あるいは展望

2. 波多野宗教哲学の射程

2-1: 弁証神学から宗教学・宗教哲学へ

(1) 概観: 弁証神学から宗教学・宗教哲学へ

1. 明治のキリスト教思想の基調=弁証神学

第一世代: 植村正久『真理一斑』(1884)

↓ 神学部(主に聖職者の養成)から人文学部へ広がる。大正から昭和

2. 宗教学・宗教哲学へ: 学問としての宗教研究=専門化

第二世代: 波多野精一

→ 「(4) 付論」へ

3. 広義の宗教学の成立: 「神学/宗教哲学/(現代)宗教学」

東京一致神学校(1877-)

→ 明治学院神学部(1886-)

東京神学社神学専門学校(1904-)

東京帝国大学・宗教学講座(1905-)

京都帝国大学・宗教学講座(1907-)、基督教学講座(1922-)

4. 近代的な「宗教概念」の導入

植村正久『真理一斑』(1884)の意義

山口輝臣『明治国家と宗教』東京大学出版会、1999年。

島藺進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ぺりかん社、2004年。

島藺進「近代日本における「宗教」概念の受容」

星野靖二「「宗教」の位置付けをめぐる——明治前期におけるキリスト教徒達に見る」

前川理子『近代日本の宗教論と国家——宗教学の思想と国民教育の交錯』

東京大学出版会、2015年。

(2) 近代的知とその状況

5. 状況の変化：明治から大正へ

教養主義・個人主義、全体主義・ファシズム

6. 有効な弁証を求めて＝弁証の学的根拠を問う → 神学の学的基盤

- ・知的営みの条件としての知のネットワーク（学の体系と神学体系）
- ・制度的再帰性と近代的知

7. 近代＝知の再帰的制度化：

「キリスト教と近代的知——本論文集の序に代えて」（現代キリスト教思想研究会『キリスト教と近代的知』2010年1-11頁）。

1) 知と制度化との関わり：古代から一貫して確認可能な事柄。

キリスト教に関しても、その知の担い手は、教会・司教制度、修道制、そして大学といった諸制度との関わりにおいて存在してきた。

しかし、近代において、知的世界はそのいくつかの構成要素を増幅させることによって、大きく変貌することになる。この点について、ギデンズが近代について行った議論を参照しつつ、検討を加えてみたい。⁽¹⁾

2) 知の公共性：人間が様々な知的活動に基づき知的世界というべきものを構築するには、その活動が公共性を獲得することが必要である。

知が特定の形式で表現され、他者とのコミュニケーションにおける共有と相互の吟味を経て改訂され、そして蓄積され、伝統を形成する。知的世界を構成するこの一連のプロセスを規定するのは、再帰性と呼ばれるメカニズムである。⁽²⁾ 古代にも近代にも妥当する。

しかし、近代になり、この再帰性は独特の展開を示すことになる。これがギデンズの言う「制度的再帰性」(the institutional reflexivity)、つまり、知の再帰性と制度化との独特の結合関係の成立にほかならない。→知の方法論的反省の強化と制度化。

3) 知の再帰性自体は、知自体の基本構造であり、近代的知特有の事柄ではない。しかし、近代的知において、この再帰性は、方法論的な懐疑と実証主義とにおいて示されるように、極度に強化され、こうして獲得された確実な知の原理から包括的な知の体系の構築が目指されることになる。⁽³⁾

現代物理学における大統一理論の構想はその典型であり、宇宙の始まりからその後の全過程（生命の誕生・進化、そして「私」の意識の生成まで）を包括する知的世界の構築が展望されている。

これは、キリスト教的知に対しても、次の三つの点で強力に作用している。

(1) 神学におけるプロレゴメナ・方法論の肥大化。

近代以降の神学思想において「プロレゴメナ」が神学体系内で有する比重を著しく増大させる傾向にあることは、神学の体系的理論に方法論的基礎を与える作業がきわめて困難になりつつあることを示唆している。これは、組織神学の体系構築がますます困難になりつつあるということにほかならない。

(2) 宗教経験との接続を通じた実証性の確保。

近代聖書学が、当初こうした問題関心によって動機づけられていたことは、19世紀のイエス伝研究の状況がよく示している。近代聖書学の方法によるイエス伝叙述が挫折という仕方では総括されるには、A. シュヴァイツァーを待つ必要があった。

(3) 諸学の体系内における神学的知の位置づけ。⁽⁴⁾

ハイデッガーが指摘するように、近代の体系構想（原理→体系、原理の確実性と体系の包括性・完結性）は、古代や中世の思惟から近代的思惟を区別するものであり、これは、近代キリスト教神学の体系構想（キリスト教的知の体系としての神学体系と、神学を包括する全体的知の体系としての諸学問の体系との二重の体系構築によって構想される）を規

定している。

ドイツ観念論の解体と実証主義の台頭という知的状況の変動の中で（19 世紀後半）、近代的知は、体系性と体系批判（←生の断片性・非完結性）を両極として展開することになり、これが、現代神学における神学の科学性（学問性）を論じる際の枠組みとなっている。

↓

4) 三点からの帰結：神学研究におけるリサーチ・プログラムの導入。⁽⁵⁾

もちろん、リサーチ・プログラムを意識的に導入し研究を推進することは、キリスト教研究においては今後のテーマであると言うべきかもしれないが、持続的な研究体制の下での研究の継続的進展を担う学派的伝統、あるいは研究所の中に、その萌芽を確認することは困難ではない。これは、近代の知的状況に対するキリスト教的知の適応の一例とも言える。

5) 知の制度化：近代における顕著な動向として指摘すべきものは、大学・学会・出版の三者が構成する知の制度の発展であろう。

研究者の組織的集団としての大学の存在は、中世に遡るものであるが、19 世紀になり、研究者の組織化は専門領域ごとに設立された学会という組織を生み出し、知の共有と評価の基準構築（知の標準化）——現在中心性という方法論的視点と「新しさ」「独創性」という価値基準——を推進した。⁽⁶⁾ キリスト教研究の分野においても、これと同様の動向が見られる。そして、大学と学会において生み出された知的成果を公にする物質的基盤を提供したのが出版業界であった。

大学、学会、出版の三者は、近代の制度的再帰性における知的世界の構築に対して、その実体化を可能にした制度と言えよう。この制度が、近代市民社会のイデオロギーの担い手であったことは言うまでもない。⁽⁷⁾

↓

この制度化がキリスト教的知に及ぼした様々な影響。とくに注目すべきは、伝統的な知の主体であった中間共同体の相対化。

キリスト教的知——とくに教義学——においては、宗教改革期から 19 世紀にかけて、教派的伝統が重要な機能を果たしてきた。しかし、近代的知の進展に伴う大学・学会・出版という知の制度化は、こうした教派の役割を低下させることになる。というのも、学会レベルにおいて、近代的学の標準に準じる仕方でキリスト教研究の基準が設定されることにより、教派的な伝統固有の基準の意義は相対化されざるを得ない。教派的伝統を超えた知の標準化は、同時に、研究における思想家個人の比重を相対的に高めることになる。

20 世紀の教義学・組織神学における代表的著作が、著者である神学者の教派的背景よりも、神学者個人の思想によって規定される傾向にあることは——キリスト教思想は第一義的に思想家個人の問題となる⁽⁸⁾——、この変化を如実に示している。これは、中間共同体レベルで機能してきた知の規範性が解体する過程と解釈することもできる。⁽⁹⁾ この相対化と解体の動向が、それに対抗する動きを生み出しつつあることも確かであるが、⁽¹⁰⁾ 近代的知がキリスト教に大きな変化をもたらすことになったことは疑い得ないものと思われる。

6) 展望：近代的知はポスト近代の状況において今後何をもたらすだろうか。もちろん、ポスト近代におけるキリスト教的知の将来像については、現時点ではわずかに予想することができるに過ぎない。

しかし、近代的知がもたらした方法論的反省の強化と近代的な制度化が、ますます進展し、たとえば、知の大衆化をさらに促進するものとなることは十分な蓋然性を有する見通しであろう。大学と出版に対する大衆化の作用は著しいものがある。⁽¹¹⁾ 問題は、この近代からポスト近代への動向が、それを生み出した近代的知自体を解体するに至るかという

ことであろう。特定の階層や集団によって担われてきた知的世界全般——たとえば芸術なども⁽¹²⁾——が、さらなる変貌を遂げつつあるとすれば、キリスト教的知もその中で進むべき道を模索せざるを得ない。

(1) ギデنزについては、『キリスト教と近代化の諸相』（2007年度研究報告論集）に所収の次の拙論を参照。

芦名定道「近代/ポスト近代とキリスト教——グローバル化と多元化」、『キリスト教と近代化の諸相』（2007年度研究報告論集）現代キリスト教思想研究会、3-18頁。

(2) キルケゴールは、『死に至る病』冒頭で、人間（精神、自己）を自己関係性から論じており、これは、その後、再帰性・参照性・言及性という仕方で問われることになる問題を先取りしたものと言える。キルケゴールは、実存性、主体性、逆説性の主張において、ヘーゲル主義的な近代精神を批判した思想家として理解されることが少なくないが——これ自体は正当な解釈であるとしても——、おそらく、こうした見方の一面性は『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』を精密に読むならば明らかであろう。

(3) ガリレオ、デカルト、ニュートンにおける近代科学の成立（17世紀の科学革命）については、次の文献を参照。

小林道夫『科学の世界と心の哲学——心は科学で解明できるか』中公新書、2009年、4-32頁。

(4) こうした点の詳細については、次の拙論を参照。

芦名定道『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、1995年、67-163頁。

(5) ここで論者の念頭にあるのは、「科学的神学」を提唱するマーフィの議論である。

Nancy Murphy, *Theology in the Age of Scientific Reasoning*, Cornell University Press, 1990.

(6) 専門学会の誕生（19世紀）がもたらした知的世界の変動によって、キリスト教思想が大きな影響を受けた例としては、生物学の専門学会の誕生と進化論論争（「宗教と科学」対立図式の形成と普及）との連関を挙げることができる。この点については、マクグラスの一連の研究が存在するが、これを扱った拙論として、次の文献を参照。

芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年、206-208頁。

(7) これについては、文学、とくに英文学の誕生に関して、多くの議論がなされている。

「文学に関するもろもろの定義が現在のようなかたちをとりはじめたのは、実のところ、『ロマン主義の時代』以降のことだ。『文学』という言葉の中に現代的な意味が発生したのは十九世紀なのだと言ってもよい」（T.イーグルトン『文学とは何か——現代批評理論への招待』大橋洋一訳、岩波書店、1985年、30頁。Terry Eagleton, *Literary Theory. An Introduction*, Basil Blackwell, 1983, p.18）

「識字層の拡大と国教会および福音主義的な非国教会の布教活動がこのような悲惨な目に遭っていた労働者階級に対して活発に行われたことも事実です。そして、そのような中で、彼らに向けた宣教的なキリスト教大衆文学作品の創作活動が芽生えたのでした。」

（高柳栄一『英文学とキリスト教文学』創文社、2009年、9頁）、「聖書の代わりとしての文学作品」（同書、167頁）。

(8) キリスト教神学の個人化は、神学思想が共同体（たとえば、教派的伝統）の制約から比較的自由に構想されるという現代の神学思想状況において確認できる動向である。これは、バルト、ティリッヒ、パネンベルク、モルトマンらの教義学や組織神学の構想が、第一義的には、それぞれの著者の個人的思想として読まれるべきであるという広く承認された事態に対応している。しかし、こうした神学思想の個人化は、トレルチが『社会教説』で論じた近代のスピリチュアリズムとの関わりで理解すべきかもしれない。トレルチと近代の徹底的個人主義の問題については、次の文献を参照。

Bradley E. Starr, Individualism and Reform in Troeltsch's view of the Church, in: *Modern Theology*, vol.7, No.5, 1991, pp.447-463.

(9) この点については、次の拙論を参照。

芦名定道「キリスト教の理念とその諸問題」、日本基督教学会北海道支部会『「キリスト教」再考——日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録』2009年、52-71頁。

なお、この拙論を受けて展開された、日本基督教学会第57回学術大会シンポジウム（北海学園大学、2009年）における論者の発題「キリスト教の可能性——伝統とポストモダンとの間で」は、学会誌『日本の神学』49に掲載。

(10) 日本の思想界では、各学問領域に対応して大規模な学会が存在する一方で、近年比較的少人数の研究集団や小規模な学会が多く誕生し、それぞれ特徴的な活動を行っている。これは、知的世界の活性化にとって中間共同体の有する意義を考える上で、興味深い動向である。

(11) 第二次世界大戦以降の大学改革による大学の大衆化とそれに連動した近代的な教養主義の解体は、近代の知的制度としての「大学・学会・出版」システムを大きく変容させてきた。これに近年の出版の電子化の動向を重ねるならば、この変化はさらに加速化されるかもしれない。日本における教養主義の解体に関しては、次の文献を参照。

竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003年。

(12) 大衆社会の文化状況の特徴の一つとして、近代以前（そして近代に入ってしばらくの間）には、特定の社会層が支えてきた「文化」的営みが、多くの人々（いわゆる大衆）の手に届くものとなったことが挙げられる。音楽も絵画・彫刻も、文学も詩も、いつでもどこでも享受することが可能であり、「だれでも芸術家になれる」状況にある。キリスト教的知に関しても、これがだれでもキリスト教研究者となれるという事態に実際に到達するかは別にしても、このことに有利な条件は確実に広がりつつあるように思われる。

(3) 知を分析する

8. 知の歴史性あるいは考古学

ネットワークの変動、公共性の変容



9. 近現代：自然科学、テクノロジーの肥大化

科学技術、高齢化、環境 → （後期）

(4) 付論：2009年度・日本宗教学会・パネル

戦前日本におけるキリスト教研究

この発題の目的は、「戦前日本におけるキリスト教研究」を概観し、その現代的意義について若干の指摘を行うことである。まず概観に先立って確認したいのは、「戦前日本」ということで問題となる開国（一八五九年）から敗戦（一九四五年）までのキリスト教研究を担った研究者について、次の三つの世代を区分することができることである。第一世代は、明治期のキリスト教思想を担った、海老名弾正、植村正久、内村鑑三、小崎弘道などのキリスト教指導者たちの世代であり、ここにキリスト教研究の発端を確認することができる。また、第二世代は、波多野精一や石原謙らからはじまり、有賀鐵太郎に至る、大正から昭和に活躍する世代である。それに対して、第三世代の研究者は、戦後にその主たる研究活動を開始し、戦後のキリスト教思想を担った世代であって、この点から判断して、本発題の範囲からは除外される（したがって、一九四六年の北森嘉蔵『神の痛みの神学』

はここでは扱わない)。

最初期のキリスト教研究は、植村、内村、海老名、小崎などの第一世代のキリスト教指導者たちによって担われた。その発端には、宣教師が伝えたキリスト教思想が存在するが——伝統的で保守的な神学あるいは素朴な信仰——、こうした伝えられたキリスト教思想は、これらの第一世代のキリスト教指導者によって、驚くべき早さで消化され、日本語におけるキリスト教研究書となって刊行された。植村の『真理一斑』(一八八四年)はその点で画期的な意義を有している。しかし、第一世代のキリスト教研究者は、いわゆる専門的な研究者ではなく、基本的にはキリスト教会の指導者であった点を忘れることはできない。こうしたキリスト教研究のあり方は、しばらくすると、一方における、キリスト教会あるいはそれに依拠した神学と、他方における、近代的学問としてのキリスト教研究との間の緊張を生じることになる。植村が関わることになった新神学問題、そしてその後の海老名とのキリスト論論争(一九〇一～〇二年)は、キリスト教研究における教会神学と近代的学問との対立の顕在化と解することができる。この対立は現代に及んでいる。

戦前のキリスト教研究も、大正期以降の第二世代の研究者になると、個々の研究領域での研究の深まりがみられるようになり、同じ欧米のキリスト教研究の紹介であっても、それは本格的で体系的な仕方で行われるようになる。その意味で、現代に至る、日本におけるキリスト教研究の基盤は、この第二世代の研究者によって形成されたと言うことができる。これは、第二世代の研究者の活動の場が、キリスト教会や神学校に限定されず、帝国大学にまで広がったことにも関連している。こうした動向は、宣教師から始まり教会と神学校に根付いた教会的神学的なキリスト教研究からの、近代的な学としてのキリスト教研究の自立と解することができるが、それは、欧米のキリスト教研究の紹介において、英語圏のキリスト教研究からドイツ語圏のキリスト教研究へのシフトが生じていることから伺える。またこの時期、キリスト教研究は多様な動向へと分岐することになる。こうした中で、キリスト教研究の学問的な基盤は確立されたのである。たとえば、波多野宗教哲学は、戦前日本におけるキリスト教研究の精華と言うことができる。

以上の概観からわかるように、戦前日本のキリスト教研究は、欧米のキリスト教研究の流行に依存し、それを追跡することを主要な課題としたものであって、その限界を指摘することは難しくない。しかし、第一世代から第二世代の研究者が据えた土台こそが、戦後から現代に至るキリスト教研究の基盤をなしていることについては、正当な評価を行わねばならず、現代日本のキリスト教研究にも、その批判的継承が求められているのである。

<世代区分とその概観>

A.プロテスタント:

・第一世代:

津田仙(1837-1908)

新島襄(1843-1890)

海老名弾正(1856-1937)、小崎弘道(1856-1938)『基督教の本質』(1911)

植村正久(1858-1925)『真理一斑』(1884)、内村鑑三(1861-1930)

佐伯好郎(1871-1965)『The Nestorian Monument in China』(1916)『支那基督教の研究』(1943)

・第二世代:

波多野精一(1877-1950)『基督教の起源』(1908、M41)、『宗教哲学』(1935)、『宗教哲学序説』(1940)、『時と永遠』(1943)

石原謙(1882-1976)『シュライエルマッハー宗教論』(1922)、『基督教史』(1934)

高倉徳太郎(1885-1934)『福音的基督教』(1927)

佐藤繁彦(1887-1935)『ルターの根本思想』(1933)

- 山谷省吾(1889-1982)『新約聖書・新訳と解釈』(全5巻)(1930-48)、
『パウロの神学』(1942)
管円吉(1885-1972)『宗教哲学の基礎概念』(1930)、『宗教復興』(1934)
桑田秀延(1895-1975)『弁証法神学』(1933)、『基督教神学概論』(1941)
熊野義孝(1899-1982)『弁証法的基督教概論』(1932)、『終末論と歴史哲学』(1933)、
『キリスト教の根本問題』(1934)
渡辺善太(1885-1978)『旧約書の神学』(三巻)(1921-24)
浅野順一(1899-1982)『預言者の研究』(1931)、『旧約聖書』(1939)
魚木忠一(1893-1954)『近代ドイツ・プロテスタント教神学思想史』(1934)
有賀鐵太郎(1899-1977)『オリゲネス研究』(1943)
賀川豊彦(1888-1960)、南原繁(1889-1974)、矢内原忠雄(1893-1961)

・**第三世代：**

- 中川秀恭(1908-2009)、松村克己(1908-1991)、滝沢克己(1909-1984)、
関根正雄(1912-2000)、武藤一雄(1913-1995)、大内三郎(1913-1997)、前田護郎
(1915-1980)、北森嘉蔵(1916-1998)、武田清子(1917-)

・**戦後**

- 北森嘉蔵『神の痛みの神学』(1946)、山本澄子『中国キリスト教史研究』(1972)

・**第四世代**

- 野呂芳男、八木誠一、田川建三、荒井献、佐藤敏夫、土肥昭夫、小田垣雅也、大木英夫、
古屋安雄、金子晴勇、水垣涉……

B.カトリック：

- 岩下壮一(1889-1940)『信仰の遺産』(1941)、『中世哲学思想史研究』(1942)
吉満義彦(1904-1945)『カトリシズム・トマス・ニューマン』(1934)
山田晶(1922-2008)

<参考文献>

- 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1970年。
土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。
古屋安雄・土肥昭夫・佐藤敏夫・八木誠一・小田垣雅也『日本神学史』ヨルダン社、
1992年。
芦名定道「植村正久とキリスト教弁証論の課題」『アジア・キリスト教・多元性』(現代
キリスト教思想研究会)第5号、2007年、pp.1-22。